

## お弁当箱から広がる私の世界

増田来瞳 静岡サレジオ高等学校

私は、小学校3年生の頃から「井川メンパ」というお弁当箱を使っている。「井川メンパ」は私の住む静岡県の伝統工芸品なのだが、このお弁当箱には大きく二つの特徴がある。

一つ目は、ヒノキで作られたお弁当箱であること。木、(ヒノキ)で作られているため、ご飯の水分をお弁当箱自体が吸収するので時間がたってもおいしいご飯を食べることができる。二つ目は、お弁当箱全体に漆が塗られていることである。漆のコーティングはお弁当箱を傷みにくくさせるだけではない。漆には、抗菌作用もあるため食材の傷みや暑い夏でも安心である。

中学校3年生の時、「井川メンパ」の職人の方を取材させていただく機会があった。その時に伝統工芸は存続が難しい状況にある産業だということを知った。そして、「井川メンパ」のように昔から受け継がれ、機能性とデザイン性を兼ね備えた様々な伝統工芸品が受け継がれなくなるかもしれないことに危機感を持った。これをきっかけに私は、Instagram・ブログ・講演・時にはラジオを通じて幅広い世代に伝統工芸品の魅力を伝える活動を続けてきた。活動を続けていく中でいつもぶち当たる壁、それは「伝統工芸品が質のいいものであるのにも関わらず買い手が少ない。」という現状だ。実際、BECOSJournalという団体が10～70代の600人にアンケート調査を行ったところ、伝統工芸品を買ったことがないと答えた人は30%にも上る。

私は、このように質が良いものであるのに買い手が少ないという問題の解決は後進国での貧困の解決に通じるものがあると考えている。なぜなら、職人の方々は一人で作品を制作していることが多く、また職人の方々の高齢化も進んでいるため商品のPRまで余裕がないという方が多い。同様に後進国の生産者も作物の生産方法には詳しいが効果的な販路を見いだせず満足な収入が得られない場合が多い。私が考える効果的な解決策は、第三者がマーケターのような立ち位置で生産者の商品の良いところを引き出しながら買い手を増やしていくというものだ。自分は、このマーケターのような立ち位置でありたいと思っている。もちろんそのためには経済や経営、マーケティングに関することを学ぶ必要があるため高校生の今の私には知識の面で足りない部分も多い。だが大学でそのような学問を学ぶことで伝統工芸品がより多くの買い手を得ることができる仕組み作りのヒントを得られるかもしれない。そして、そこで得たヒントをいつか世界の貧困問題の根本的な解決へとつなげていくことが私の夢だ。

お弁当箱が伝統工芸品について考えるきっかけとなり、そこで気づいた問題点から世界の貧困の解決へと思いを巡らせることになるのは、「井川メンパ」を使い始めた小学校3年生の頃は想像もしていなかったことだ。静岡の伝統工芸品を取り巻く問題の解決策は、意外にも世界の貧困問題の解決とリンクしている。「井川メンパ」は、そのような世界のつながりに気づかせてくれた。まだまだ未熟な私だが、自分の世界を広げてくれた伝統工芸品にいつか恩返しできるような活動をしていきたい。

参考文献：伝統工芸品メディア BECOS Journal 2021年実施インターネット調査